

2015 年度

中学校 入学試験問題

国語

50 分／150 点満点

[受験上の注意]

- ※ 試験開始の合図があるまでこの冊子を開いて見てはいけません。
- ※ この冊子には、問題および解答用紙が入っています。乱丁、落丁、印刷不鮮明な箇所などがあった場合には申し出てください。
- ※ 解答用紙には必ず受験番号を記入してください。
- ※ 答えはすべて解答用紙に記入してください。

問題文は 3 ページ目から 24 ページ目にあります。

一

次のa～jの各文について、①・②の各問いに答えなさい。

- ① 各文中の——線部のカタカナをふさわしい漢字に直しなさい。
- ② 各文中の——線部の表している漢字の意味としてふさわしいものを、下のア～コから一つずつ選び、記号で答えなさい（同じ記号を二度以上用いることはありません）。

- a あらたな救セイ主があらわれた。
- b 食品を適セツな温度で管理する。
- c 歩行者たちの通行を優センする。
- d このままでは消費増税は必シだ。
- e 旅行に向けメン密に計画を練る。
- f 自家用の軽飛行機をソウ縦する。
- g 護エイの警官らの労をねぎらう。
- h 両者は対ショウ的な性質を持つ。
- i 圧シユクした空気が放出される。
- j 国のコウ亡の歴史をたどり直す。

- ア 思ったようにすること
- イ なくなってしまうこと
- ウ 向かいあっていること
- エ 手あつく対応すること
- オ 力でおさえつけること
- カ 力をかしてまもること
- キ つきそつてまもること
- ク とうぜんそうなること
- ケ うまくあてはまること
- コ ゆきとどいていること

二 次の文章を読み、後の問に答えなさい。

引越し屋さんや運送屋さんのマークは、A 生き物が多い。

力強く荷物を運ぶゾウや、伝書鳩など手紙を運ぶハト、親子で引越すカルガモ、大きな口で魚を運ぶペリカン、すばやく走るヒョウ、袋に子どもを入れて運ぶカンガルーや子猫を口にくわえて運ぶ親猫など、B 動物園である。こうして見ると、物を運ぶ生き物というのは意外に多い。

アリのマークもある。アリも、大きな餌を力を合わせて運んでいくイメージがある。ところが、自然界にはそのままズバリ「アリの引越し」と呼ばれる現象もある。

夏の日午後、何百、何千というたくさんのアリたちが行列を作り、幼虫やさなぎの入った繭をくわえて移動していることがある。これは、アリの家族が、棲みにくくなった巣から、新しい土地へ移動する引越しだと考えられていた。

ところが、それは大きな誤解であった。引越しの光景は、アリの家族が引越しするような、ほほえましいものではなかったのである。

サムライアリというアリは、自分で餌を取ってくることをしない。ただし、大きな鋭いあごを持ち、武装している。そこでサムライアリたちは、クロヤマアリの巣を襲って繭を奪い、繭から生まれたアリを奴隷として働かせて餌を集めさせるのである。

じつは、アリの引越しのように見えたのは、奴隷狩りを終えたサムライアリたちが略奪した繭を戦利品として持ち帰っているところだったのである。まさに夏の午後の惨劇だったのである。

※略奪

おそって、人のものをむりやりにうばい
とること。

※惨劇

ひさんなできごと。

サムライアリの奴隷狩りは、じつに計画的である。

はじめに偵察役のアリがクロヤマアリの巣を発見すると、巣の規模から繭の数を推測する。そして、十分に奪うべき繭の数があるとわかると、偵察役は道しるべフェロモンをつけながら巣に帰ってくる。この道しるべをたどって、隊列を組んだ大群のサムライアリたちが、クロヤマアリの巣に迫るのである。巣にたどりついたサムライアリの先鋒部隊が、初めに巣を守る兵隊蟻に襲いかかる。そして、そのすきに本隊のアリたちが巣の中に侵入し、繭を奪うのである。

※フェロモン

動物の行動などにえ
いきようをあたえる
物質。

※先鋒

先頭。

即戦力の働き蟻を連れ帰っても、すぐに逃げられてしまふし、抵抗もされる。そのため、無抵抗な繭を持ちかえり奴隷とするのである。

繭から産まれたクロヤマアリは、サムライアリのために餌を集め、巣を作り、幼虫を育てる。しかし、哀れな奴隷たちは自分たちが奴隷であることさえ知らない。アリは、特有のにおいで自分の仲間を判断するが、サムライアリたちは奴隷のアリと体を接触し、クロヤマアリのにおいをもらっている。そのため、奴隷蟻たちは、自分たちを誘拐してきたサムライアリを、自分の家族だと信じきって働き続けるのである。

もともと、サムライアリの大家族も最初は一匹の女王蟻から始まる。一人ぼっちの女王蟻は、どのようにして奴隷狩りをするのだろうか。C、サムライアリの女王は大胆不敵な行動をする。サムライアリの女王はクロヤマアリの巣を見つけ出すと、果敢にも単身で巣の中にとび込んでいく。そして巣の中にいるクロヤマアリの女王を噛み殺し、巣を乗っ取るのである。そして、サムライアリの女王が産んだ卵を育てさせて、そこをサムライアリの巣とするのである。

※果敢にも

ものごとを思いきつ
てするようす。

奴隷蟻の寿命が尽きれば、労働力が足りなくなる。するとサムライアリたちは、再び奴隷狩りに出かけるのである。サムライアリはクロヤマアリの巣を襲っても、けっして全滅させることはなく引き上げる。そうしておけば、時間が経ってから同じ巣を何度も襲って、奴隷を手に入れることができるのである。

こんな武士の風上にもおけない I アリに「サムライ」と名付けけるのは、ふさわしくないような気がするが、自分は働かずに暮らしていることから、「サムライ」と名付けられた。サムライアリも、D、クロヤマアリと同じように働き者だったと考えられるが、他のアリに働かせるという大胆な戦略を思いついて、奴隷狩りして生活するアリに進化した。そして自分たちで餌を集めたり、巣を作ったりする術をすっかり忘れてしまったのである。今となっては、サムライアリは、クロヤマアリなしには生きていくことができない。クロヤマアリの巣を見つけることができれば、死活問題なのだ。

E 働かずに暮らすというのも楽ではないようだ。こんなリスクを負って苦勞をするくらいならば、自分で働いた方がよっぽど楽なような気もしてしまうが、どうだろう。

(出典・稲垣栄洋『身近な虫たちの華麗な生きかた』)

問一

A E にあてはまる語として最もふさわしいものを、後のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。なお、同じ記号は一度しか使えません。

ア どうやら イ もともと ウ ふしぎと エ まるで オ じつは

問二

線部 1「大きな誤解」とありますが、実際はどのようなだったのですか。その説明として最もふさわしい一文を本文中から探し、初めの五字を答えなさい。句読点や記号は一字とします。

問三

線部 2「クロヤマアリの巣を襲って繭を奪い、」とありますが、その理由を「繭は…だから」という形にあてはまるように、本文中から三字で探し、ぬきだしなさい。句読点や記号は一字とします。

問四

線部 3「じつに計画的である」とありますが、どのような計画ですか。計画内容を示した後の文を、計画通りに並べかえてその順序を記号で答えなさい。ただし、使わない文が一つあります。

ア 先頭にいるサムライアリが戦っているうちに、他のサムライアリが巣の中の繭を奪う。
イ 多数のサムライアリがフェロモンの付けられた道を通り、クロヤマアリの巣を襲う。
ウ サムライアリの女王がクロヤマアリの女王を噛み殺し、地位を奪い取る。
エ クロヤマアリの巣を探して見つけると、巣の大きさから繭の数を予想する。
オ 攻撃する巣を見つけたサムライアリは、目印にフェロモンをつけながら自分の巣に戻る。

問五 サムライアリは他のアリに働かせる生活をするために、繭を奪うこと以外にどのような工夫をしていますか。「…こと。」という形にあてはまるように、本文中から十九字で探し、ぬきだしなさい。句読点や記号は一字とします。

問六 I に入れるのに最もふさわしい語を後のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 頭腦的な イ 優秀しゅうな ウ 卑劣ひれつな エ 危険な

問七 ——— 線部 4 「リスク」とは「損害を受けるかもしれないおそれ」という意味ですが、ここではどのようなことが「おそれ」だと言っているのですか。その説明として最もふさわしいものを後のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分たちで餌を探すなどの生きる手段を忘れてしまったこと。
イ 他のアリの巣を見つけないと自分たちでは生きられないこと。
ウ 本来、アリはよく働く特徴ちようがあるのにいかされていないこと。
エ 自分の仲間ではないのに家族だと信じ切って働き続けること。

問八 クロヤマアリは、なぜサムライアリのために餌を集めたり巣を作ったりするのですか。その理由として最もふさわしいものを後のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 正体が知られてしまうと怖こわいのでわざとサムライアリのふりをしているから。
イ クロヤマアリの働き蟻は巣を守るために、よく働く本能が備わっているから。
ウ サムライアリにいつも見張られて、働かないとひどく攻撃されてしまうから。
エ 自分たちを産んでくれたクロヤマアリの女王のにおいを感じとっているから。

問九 本文の特徴を説明したものとして、あてはまるものを後のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 初めに私たちが考えていた昆虫の行動が本当は違う意味だったということを示し、読者に興味を持たせた上で、昆虫の生態を明らかにしながら、違った角度で人間世界を見るおもしろさを読者に投げかけている。
イ 誰もが知っている昆虫を取り上げ、ふだんは気に留めないような昆虫の実態をわかりやすく説明している。
ウ 昆虫の気持ちが理解できるようになり、それを人間の社会でもいかすべきだと提案している。
エ 昆虫が苦手、きらい、あまり知らないという人にも読みやすいように、多くの人が知っている昆虫の生態を例として、人間の生活にてらし合わせながら説明し、いかに昆虫が人間よりも優れた生き物であるかを実証している。

エ 子どもがカブトムシに夢中になったり、大人がホタルを鑑賞かんしたりすることなどからもわかるように、日本人は昆虫好きなので、昆虫を保護していかねばならないことを、一度は目にしたことのある昆虫を用いてうったえている。

三

次の文章は長江優子著『タイドプール』の一場面で、二年前に「お母さん」を乳ガンで失った小学五年生の「えり子」の家に、過去二回「お父さん」の友人として来たことのある「マコさん」が、はじめて「えり子」の「新しいお母さん」としてやってきた日の様子をえがいています。これを読んで、後の各問に答えなさい。

私はひき戸に手をかけ、キッチンとリビングをつなぐ柱にもたれかかった。むじゃきに近づくにはためらいがあるし、だからといってマコさんをのこして自分の部屋へもどることもできない。

私はひとさし指の爪をかじった。緊張と不安は、しだいにいらだちにかわっていく。こんなときこそお父さんの出番なのに、今日は緊急の休日出勤で朝はやくでかけてしまった。

へ 1 へ

「はいるといいけど。」

マコさんはたちあがると、テレビの横の壁のまえで両手をひろげた。

「子どもたちをつれてきてもいいかな。」

「えっ？」

「だから私の家族。」

「……マコさん、子どもがいたんだ。」

マコさんはハトのように首をかしげると、大きな笑い声をあげた。

「あのね、私、金魚を飼ってるの。ヨージさんからきいてなかった？」

「うん。」

「ここに水槽をおいてもいいかな。」

「金魚？ ああ、それなら。はい。」

動揺する私を見て、マコさんはまた笑った。

(まぎらわしいこと言うな)

私ははるかしくて、床に目を落とした。

水槽の問題がかたづいて安心したのか、マコさんはソファに身体を深くしずめた。

「えり子ちゃん、ちよつと。」

マコさんがソファの表面を指先でつついたので、私はおしりひとつぶんはなして、マコさんの横にすわった。こんなに近い距離でむきあうのは、はじめてだった。

「大きな決断をしてくれてありがとう。私、とてもうれしかったよ。」

マコさんの目は近くで見ると、ものすごく大きかった。

ラクダみたいな目。

まばたきすると、ばっさばっさと音がきこえてきそうなほど、まつげが長い。

「えり子ちゃんとお父さんの生活に私がまざるとどうなるか、さっぱり見当つかないんだ。あなたもそうだと思うけど。」

私はうなずいた。

「私、思うの。いっしょに暮らしてるのに、マーブルチョコのアイスみたいにまざりきらない関係なんてよくないって。だからね、」

マコさんは小さなせきばらいをした。

「まずはその、ルールを決めたいの。」

私は小さくつぶやいた。

ルール。

なんだかごっこ遊びみたいなひびきだ。でも規則というとおしつけられているようなきゅうくつさがあつて、話をきくまえから反発したい気分になる。

ルール。まあいいだろう。

「どこのおうちにも紙に書くことができるルールと、目に見えないルールがあると思うの。紙に書けるルールというのは、……、」

「お皿洗いは交代で、とかでしょ。」

「そう。それはシンプルでわかりやすい。じゃあ目に見えないルールは？」

私は首を横にふった。

「そうだね。実は私もわからない。だって目に見えないルールは、言葉であらわしにくいからね。とてもフクザツでむずかしい。」

マコさんは眉間にしわをよせて腕をくんだ。

「だからこればかりは時間をかけて理解しあうしかないのね。なにか気づいたら、おたがいおなかにためこまないで、そのつど指摘して、そのつど改善していく。」

「うん。」

「私、おつちよこちよいだから、たくさん失敗したり、いろんなむずかしいことをしでかす気がする。でも、」

マコさんは腕をほどいて、私の手をぎゅつとにぎりしめた。

「えり子ちゃんのこと好きだってこと、これだけはずっとかわらないから。ね？」

「……………」

マコさんはのこりの紅茶をくつとのみほした。

キザというか、ストレートというか……。

〈 2 〉

私とマコさんの間にただよう甘ったるい空気をとかしてしまいたくて、私はあわてて会話の糸口をさがした。

「マコさんは犬がきらいなの？」

「きらいではないけど、苦手だな。」

「じゃあ馬は？」

「馬は好き。えり子ちゃんは？」

「犬も馬も好き。」

「そう。」

「……………」

〈 3 〉

インターホンがなった。私はにげるようにして、リビングのドアをあけた。こんどは宅配便だった。

私はマコさんの荷物を部屋にはこんだ。配達のおじさんから最後のダンボール箱をうけとったとき、よろけた私の足元にニンジンとジャガイモがころがった。

マコさんがふりむいた。

「それ、今晚の材料だよ」

その夜はカレーライスだった。

マコさんはひっこしの日にはかならずカレーライスを食べるのだそうだ。家族のもとをはなれた大学生のときからそうしてきた、とじまんげに言った。

ニンジンですりおろしたものを鍋なべに入れた。こうすると、辛からさがマイルドになるという。味見をしてみると、たしかにマコさんの言うとおりだった。でも、甘口を食べなれている私には、やっぱり辛かった。

七時すぎ、お父さんが駅前えきまえのケーキ屋さんの箱を片手に帰ってきた。あそこのチョコエクレーは本当においしくて、昼すぎには売りきれてしまう。きつとお父さんは、会社へ行くまえに、予約しておいたのだろう。

4

食事のまえに、ちょっとしたトラブルがおきた。

マコさんのすわる場所だ。

私はいつも壁側の椅子いすで、そのむかいがお父さん。マコさんはまえに来たときは私のとなりだったけれど、キッチンから遠いのはなにかと不便なので、これからはお父さんの場所にすわることになった。

お父さんとマコさんは学期はじめの席がえのように、お箸はしをもって椅子をガタガタいわせながら新しいポジションについた。

こうしてようやく夕食になった。

私は「いただきます。」と言い、お父さんとマコさんはビールのはいったグラスをカチンとあわせて、「かんばい！」と言った。

いつもとちがう、黒っぽい色をしたカレーライス。

お父さんは「うまいうまい。」を連発しながら、すごいいきおいでスプーンを口にはこんだ。ときおり、息つぎをするように顔をあげては、

「マコさんには学校のこととかきちゃんと話してあるから安心しろよ。なにかあったらわすれずに伝えるんだよ。もちろんお父さんにでもいいけど。」

と、新生活の心得をさとすのだった。

私はうなずいた。舌がふるえてしゃべれなかった。口いっぱい水をふくんだら、これが逆効果で、舌のうえで火花が火花をちらしているようだった。

やっぱりカレーは甘口がいい。

お父さんは最後の一口をかみおえないうちに席をたとうとした。マコさんはお父さんの肩先かたさきに手をやった。お父さんは浮うかせたおしりをもとにもどして、マコさんに皿をわたした。マコさんはキッチンに消えると、大盛りのカレーライスをトレイにのせてもどってきた。お父さんは小さな声でお礼を言うと、またすぐに食べはじめた。

(おかわりなんて、自分でするのがあたりまえだったのに)

なにげない動作が、二人の間ではすでにべつのあたりまえになっていて、背筋がむずつEつとした。

(お母さんと囲んだ夕食って、どうだったっけ?)

ぼんやりとしていて、うまく思いだせない。おさなかつたせいもあるけれど、きつとあのころはそれが【 X 】だと思っていたからだろう。

大切なことは、失ってからそれが大切だとわかるものらしい。

【 Y 】 ことほど、ますますそう思えるのだ。

「どうした？」

お父さんと目があった。くちのはじっこにごはんつぶをつけている。まぬけな顔だ。私は肩^Fをすくめると、ごはんをカレーにからめた。

チョコエクレアを食べたあと、私とお父さんはあとかたづけをマコさんにまかせて、サツカー中継^{ちゅうけい}を見た。青いユニフォームを目で追いながら、耳はひき戸に集中した。

水のはねる音。

皿と皿が当たる音。

いつもはおとうさんが夕飯を作って、私が皿洗いの係だった。だんだんうしろめたい気分になってきた。

お客さんに家事をまかせているような、そんな気分。

^G（はやまったかな）

あの人たちは、いずれ結婚^{けっこん}するかもしれない……。

はじめてマコさんに会ったときから、そんな予感がしていた。それも案外わるくないと、心のどこかで思っていた。

いつだったか、風呂^{ふろ}あがりに見たドラマ。主演の親友が、主演の肩をたたきながらこう言った。

「結婚なんてノリとタイミングよ。思いきってゴールインしちゃいなさい。」

なぜかあのつまらないセリフが氣にいった。私へのエールのように思えた。

それからしばらくたったある日、お父さんが本当に結婚話もちだしたから、私はせんべいの袋^{ふくろ}のはじっこを前歯でかじりながら、これがノリとタイミングとばかりに軽くオーケーしたのだった。

あのときの【 Z 】が正しかったのかどうか、今になって急に不安になってきた。

キッチンから鼻歌がきこえてきた。

ボールが坂道をころがっていくような、なめらかな英語の歌。

「ねえ、お父さん。」

「ん？」

「マコさんのこと、なんて呼べばいいかな。」

お父さんは両手を後頭部にのせて天井^{てんじょう}をながめた。

「そうだなあ、今までどおり『マコさん』のままでもいいんじゃないかなあ。あ、お母さん^Gって言いたかったら、そう呼んでもかまわないんだよ。」

わかってないな、そんな簡単に言えないからきいてみたのに。

「そうだ、マコさんにあだ名をつけようか。なにがいいかなあ。マコ……マーマー……マーボードウフ。なんてね。ちよつとこっちの肩をもんでくれよ。」

「ふん。」

私は鼻で笑ってたちあがった。

〈 5 〉

いい案が思い浮かばないので、私はこれまでどおりマコさんと呼ぶことにした。

お母さんがやってきた第一日目は、チョコエクレアがなければいつもの日曜日と変わらない

一日だった。

でも心の底は、ざわざわとさざ波がたっていた。

こういうのを嵐のまえの静けさというのだろう。

翌朝から強風が吹き荒れた。

(出典・長江優子『タイドプール』)

問一

へ 1 ヲ 5 にはいる文として最もふさわしいものを、次のア～オから一つずつ選び、記号で答えなさい (同じ記号を二度以上用いることはありません)。

ア なんてつまらない会話。

イ お父さんは本当にのんきな人だ。

ウ なぜなら今日は、特別な日だから。

エ お父さんの欠点は、タイミングがわるいことなのだ。

オ なんともいえない、こっぱずかしさ。

問二

——線部 A「マコさんは小さなせきばらいをした」とありますが、このときのマコさんの気持ちの説明として最もふさわしいものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア これから自分のむすめとして接することになるえり子に何をどう話したらいいか自分でもよく整理できていないという気持ち。

イ これから家族の一員として自分の存在をきちんと受けとめてもらいたいと思い、自分の考えを主張しておうという気持ち。

ウ これから先さまさまな問題がおこることを予想して、今のうちに自分の言いたいことをはっきり伝えておうという気持ち。

エ これからどうしていくのがよいのかを自分なりにしっかりと考えて、そのことをえり子にもきちんと伝えたいという気持ち。

オ これから母親として接することになるえり子に、たとえ反発されようとも、自分のやり方にしたがってほしいという気持ち。

問三——線部B「まあいいだろう」とありますが、この言葉にこめられたえり子の気持ちの説明として最もふさわしいものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア ルールという言葉から自由な行動を制限されるような気分も感じられたが、新しい母親との生活が始まる喜びの方が大きくて、今はどんなことでもがまんできると信じている気持ち。
イ ルールという言葉聞いて、素直に受け入れられない気持ちも感じてしまったが、この後マコさんが何を言おうとしているのかをきちんと聞くことも大切だと思い直している気持ち。
ウ ルールという言葉にゴッソ遊びのようなひびきを感じたが、血のつながりのないマコさんとの関係など、どうせ家族ゴッソこのようなものになるにちがいないと開き直っている気持ち。
エ ルールという言葉の持つ強い力にはしたがいたくないという気持ちがあり、ましてやマコさんの言うことなどには決してしたがうつもりはないということを固く決心している気持ち。
オ ルールという言葉を持ち出したマコさんの冷静さに舌をまく気持ちが生まれたと同時に、彼女が今後の家族三人の生活をしつかり考えぬいているのだということに共感する気持ち。

問四——線部CとDの「むずかしい」の説明として最もふさわしいものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア Cの「むずかしい」は、「けっしてだれにも理解できないこと」という意味で使っているのに対し、Dの「むずかしい」は、「見苦しいこと」という意味で使っている。
イ Cの「むずかしい」は、「うまく対応できないこと」という意味で使われているのに対し、Dの「むずかしい」は、「むしゃくしゃすること」という意味で使っている。
ウ Cの「むずかしい」は、「すぐにはわからないこと」という意味で使っているのに対し、Dの「むずかしい」は、「なかなか解決できないこと」という意味で使っている。
エ Cの「むずかしい」は、「どっちつかずであまいなこと」という意味で使われているのに対し、Dの「むずかしい」は、「きみようなこと」という意味で使われている。
オ Cの「むずかしい」は、「答えの出ないこと」という意味で使っているのに対し、Dの「むずかしい」は、「やがては理解してもらえること」という意味で使っている。

問五 ―― 線部 E「背筋がむずつとした」とありますが、この時のえり子の気持ちの説明として最もふさわしいものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大好きな父親がマコさんにうばわれて、すでに自分の手がとどかないほど遠い存在になってしまったということにゾッとする気持ち。

イ まだおさなかつたとはいえ、本当の母親とすごした毎日の出来事がうまく思いだせないことに、自分の冷たさを実感している気持ち。

ウ これからマコさんとすごしていく毎日のことを思うと、今までの不幸がすべて洗い流されるような気がしてくすぐったく思う気持ち。

エ 父親に取り入るような態度で接するマコさんに対して、どうしてこんなになれるのかと心の中で反発をおぼえる気持ち。

オ 子どもである自分には分らないような関係が、父親とマコさんとの間にできあがっていることに気づき、気はすかしく思う気持ち。

問六 ―― 線部 F「肩をすくめる」とありますが、この時のえり子の気持ちの説明として最もふさわしいものを、

次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 新たに始まったマコさんとの生活にまだなじめないでいる自分の気持ちに十分な関心をはらおうとしない父親に対して、あきれはてた思いを感じている気持ち。

イ まぬけな顔でマコさんの言われるがままに行動している父親を見て、これが本当に自分の父親なのだろうか、なにも言葉にできない思いを感じている気持ち。

ウ マコさんが家に来てとても幸せに感じている父親に対して、変なことを言いだしていきなりおこらせてはいけないと、おびえるような思いを感じている気持ち。

エ なくなった母親に対するのとは違うふるまいをする父親を目の当たりにし、マコさんの存在が父をこれほどまでに変えたのかと意外な思いを感じている気持ち。

オ いつもと違うマコさんのカレーをおいしそうにはおぼる父親に対して、自分は甘口のカレーの方が好きなのにと言いたいのに言えない思いを感じている気持ち。

問七 【X】 【Y】 【Z】 にはいることを、それぞれ指定された字数で文中からぬきだしなさい (X・Yはそ

れぞれ五字、Zは二字)。

① ここにはえり子のどのような気持ちがあらわれていますか。「……気持ち。」という形にあてはまるように、文中から十五字でぬきだしなさい。

② えりこはなぜそのような気持ちを感じたのでしょうか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア ノリとタイミングだけで父親の再婚に賛成してみたが、今日はじめてマコさんと顔をあわせてみて、自分の考えのあさはかさを思い知らされたから。

イ 父親と自分に心からつくそうとしてくれるマコさんの様子を見て、彼女に必要な以上に気をつかわせてしまっているような申しわけなさを感じたから。

ウ それぞれにマイペースな父親とマコさんを見ると、これまで大切にしてきた自分自身の生活が無理にひっかきまわされそうな予感を覚えたから。

エ 当初は父親がマコさんと再婚することをわるくなくないと思っていたのに、自分がマコさんをまだ家族の一員としてみとめていないことを実感したから。

オ 実の母親のこともきちんと思いたせなくなっていた自分にいらだちを感じる反面、マコさんをいつくしむ気持ちも感じるができないでいたから。

